

# PHD LETTER

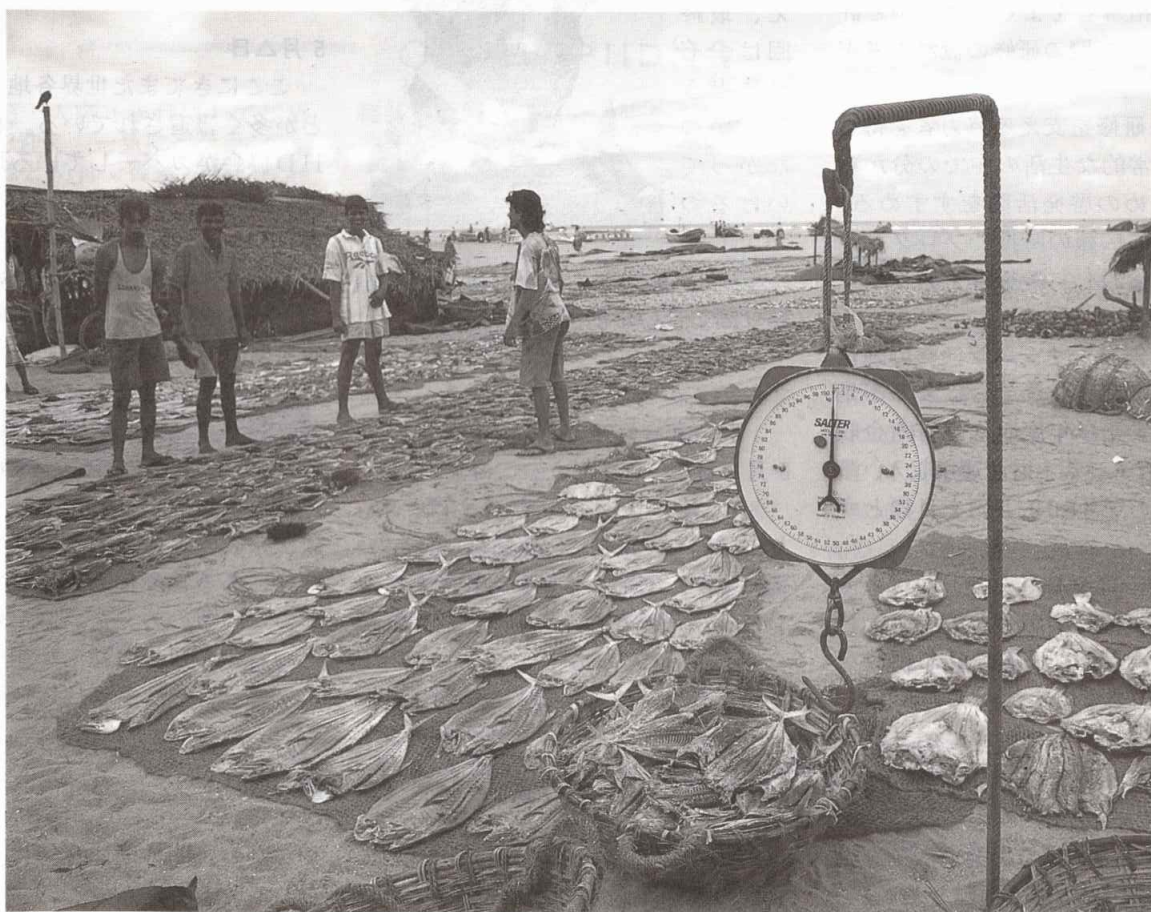
## 75

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT 2000・6

- 古参職員フジノに聞け ..... 3P
- 研修生レポート ..... 4-5P
- 新しいPHDです ..... 6-7P

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄  
編集人：藤野 達也  
住所：〒650-0022 神戸市中央区元町通5-4-3  
元町アーバンライフ202  
TEL(078)351-4892 FAX(078)351-4867  
e-mail：phd@po.hyogo-iic.ne.jp  
定価：100円



スリランカ、ニゴンボ 撮影：FUJINO.T

砂浜一面に広げられた魚の干物。  
ゴザとカゴと鉄の棒で加工場兼お店。  
1匹2匹じゃなくてカゴ単位で買ってくれなきゃ  
ハカリが役立たないよ。



## 東西南北 問題解決 取組日記



4月×日

2000年度がスタート。PHDは今年で20年目に入る。これまでと事業内容に大きな変更はないが、理事会で承認された今年度の事業方針の大筋は次のとおり。

研修—日本での研修のより一層の充実と帰国後の有用性を高めるため、研修生と指導者をまじえた計画と評価を行い、1年間の研修の流れを考慮する。

啓発—研修を支える協力者を得ること、日常的な生活の中での分かち合いのための啓発活動をすすめる、そのために広報の時期、プログラムの充実を検討し、参加者を増やすことを図る。

総務・財務—チームワークの強化で、新人に交替したことによる不足を補う。また単年度収入は寄附金収入、会費収入、基本財産運用収入、事業収入などで4800万円を目標とする。

職員の一部交替もあり、しばらく落ち着くのに時間が必要ですが、皆様のより一層のご支援を得て活動をすすめていきたいと思っています。

4月0日

ここ数年、春の行事はゲームを多用した国際協力ワークショップでスタートしてきたが、今年はその前の4、5月に入門セミナーを4回シリーズで神戸で開催。オーソドックスなものと企画したが一方通行の講義だけでなく小グループでの話し合いを毎回組み入れて行った。初回は、世界に存在する問題を挙げ分類。

2回目はその原因、3回目は対策を考え、最終回は、それにどう私達がつながっていかれるのかでしめ

くくった。毎回25人ほどが集まり、活発な話し合いが展開された。

この手のセミナーは出前もします。

5月×日

いい仕事をしようと思えば、やりっぱなしではなく、評価をし、その後を生かしていくことが大切である。PHDの研修活動も、研修生と職員さらに指導者の方々も含めて度々行って来た。人材育成は評価がしに



くく、数値化もなじまず、また時間のかかることではあるが、20年という区切りを控え、今年度内に外部の海外協力専門家を招聘して、パプアニューギニアと北タイのフィールドについて評価活動を行うことになった。これまでアジア・コミュニティ・トラスト、とよなか国際交流協会等で仕事をされてきた、雨森孝悦さんあめのもりたかよしにその役目をお願いし、またその費用をアユス=仏教国際協力ネットワークからNGOプロジェクト評価支援として助成していただくことが決まった。感謝。

5月△日

ここにきてまた世界各地でもめごとが多く報道されている。私たちPHD協会がカバーしている地域だけでも、フィリピン南部、インドネシアのアチェ、マルク諸島、スリランカのシンハラ-タミルの争いといったメジャーなところだけでなくビルマの政府対カレンなど少数民族、ソロモン諸島の民族対立、フィジーの民族対立等々。武力を伴った争いが起これば、草の根レベルの小さな開発への積み重ねはふっとんでしまう。民族、宗教の違いというよりは、その背後にある富や権力をどれだけ持っているのが争いの元だ。分かちあうことの対極の状況は悲しい限りだ。

総理事代行 藤野達也

## 今年の会費をお願いします。

この6月でPHD協会が活動を始めて、いよいよ20年目を迎えます。この20年の間に、PHDのような国際協力NGOを取り巻く状況は大きく変わりました。国境を越えた、人、モノ、金の移動は飛躍的に増大し、私たちとアジア・南太平洋地域をはじめとする世界のつながりはますます深くなり、日常のそこかしこに世界を感じられるようになりました。

また、阪神淡路大震災を契機に、社会でのボランティア活動への認識が高まり、一昨年にはいわゆるNPO法も成立しました。そうした「追い風」がある一方で、資金面ではどの団体も苦しい台所事情です。

多くの団体にとって安定した自己資金の確保が最大の課題ですが、それは容易なことではありません。様々な活動をする団体が年々急増する一方、支援者の裾野の広がりはその追いついていません。団体間で支援者という限られたパイの獲得競争をしているようなものかもしれません。いきおい、助成金などの財源に頼ることが多くなっています。

これまでPHDは、皆様のおかげで、収入のほとんどを会費、ご寄附などの自己資金でまかなってきました。しかし、ご存知のように近年、収入は下降線をたどっており、今年度もここまで苦戦中です。昨年度からはい

くつかの民間の助成金等にも、申請をしています。

PHDの活動は「助成金が得られなかったから、今年はやめよう」というようなものではありません。日本とアジア・南太平洋地域の草の根の人々による取り組みを息長く応援していくものです。そのためには他の活動以上に安定した自己資金が必要と考えています。

6月はみなさんに会費の納入をお願いする時期です。会員の方には会費納入データもお入れしました。草の根の人材育成のため、継続したご協力をお願いいたします。

## 特別連載 “古参職員フジノに聞け!”

— 第2回 PHDの宿命 の巻

— 前号では、PHDの創世期について、今回は80年代後半から現在に至るまでのPHDの歩みを振り返ります。 —

編集部(以下編):さて、前回の続きなんですけど…

フジノ(以下フ):職員が岩村先生のメッセージの持つ意味や可能性に気がついて、研修の内容にも変化が必要だと思い始めたころ、PHD活動の盛り上がりは「頭打ち」の状態でした。結果がでるには時間が必要な帰国した研修生たちのためにも、ブームで終わらせてはならないのがPHDの「宿命」。その思いを実現するためには、それを支える組織を継続させなければと、YMCAで仕事をしていた草地さんを迎えたのが84年11月でした。

編:そこで草地さんが果たした役割は?

フ:元気さに加えて草地さんの牧師としての人脈やYMCA時代のネットワークが大きかったと思います。地域的にも関西中心だった支援者の輪が、関東地方にも広がりました。

編:91年に10周年、93年には藤野さんが1年間海外へ研修に出られましたが、そこらへんの話をお願いします。

フ:90年代に入り、“NGO”や“国際協力”といった言葉に対する認知度は上がっていましたが、運営の点では、バブルがはじけ、お金が集まりにくくなってきました。「このままじゃ、人件費倒産するで」などと冗談

ともつかない話もできました。

研修は、10周年の時に「次の10年をどうするのか」という大きな問題を前にし、一度PHDを外から客観的に見てみたいと思ったからでした。イギリスやインドや南太平洋の様々なNGOを訪ね、勉強してもらいました。帰ってきたら席がなくて、荒ゴミで拾ってくるまではミシンが机代りでしたけど。

編:そして、95年の震災…

フ:直後は大変でしたが、96年度になんとか通常の事業規模に戻りました。ある意味、10周年の時には気付かなかったことを見直すいい機会になったと思っています。

編:具体的に言うと…

フ:95年までに研修生を呼ぶ対象国は10カ国になっていて、限られた能力しかないのにずっと拡大傾向がありました。それを、過去の研修生のつながりや蓄積を生かすために、今まで研修生を招いてきた地域からさらに人を選び、その地域の活動をよりよくしていこう、という方針に変えたわけなんです。

また、研修内容に関しても、初期のころは長めの設定だったのに対し、いろいろなものを見せてその中から自分に合ったものを自ら学んでもらえるようにと、2週間前後の研修を

重ねていくようになりました。つまり、「10学んでもすぐに役立つのは2〜3だろう。今は村の状況には合わないものだってあるかもしれないが、あとになって生きてくるものもあるだろう」と考えられるようになったわけです。技術移転だけではなく、交流の中からお互いに学び合うことの可能性の大きさがわかってきたということだと思っています。

編:その選考と研修における変化には、やはり1年間の海外研修で学んだことも影響を与えていましたか。

フ:外に出てわかったことのひとつは、PHDのやっていることの本筋は間違っていない、しかし、中身は時代に合わせて磨いていかなければならないということでした。そして、研修生たちの村の生活改善も大切だけれど、それと同じぐらい日本の人の行動に対する働きかけも大事だということに気がつきました。

編:研修生に日本で研修を受けてもらうと同時に、彼らとの交流を通して、日本の人が日本の問題を再確認することから始めなければならぬ、ということですね。

フ:言葉としては前から言ってきたのですが、それを具体的な行動につながるようにしたい。でもこれがタイヘン。これだけではお金が集まりやすいアピールにならないし。

編:うーん、なにやら話がムズカシクなってきましたねー。

—さて、次回はいよいよPHDのこれからの方向性に迫ります。乞う御期待!—

## ▶▶ 私たちも応援団

— 評議員を訪ねて

今回は本部を移転して間もない、生活協同組合コープこうべ(本部 神戸市)に宮内明彌常務理事をお訪ねしました。

宮内さんは「PHDとコープは共通する点が多く、互いに学び合うことが多いのではないかと開口一番。

例えば、コープで行っている環境・資源に配慮した取り組みも、元はコープの組合員、つまりは地域の人々から出てきた要求です。コープは組合員によって運営されており、1人1人の意見を大切にすることが原則であるとおっしゃられました。

また、かつてコープでは着色タラ

コと無着色タラコを並売し、消費者にどちらを買うのかを選んでもらう形にしたそうです。その意図は、「無着色タラコの方が体に良いことはわかっている。しかし、それを勝手に『これがいいですよ』と押し付けてしまっただけでは意味がない。消費者1人1人が自分で考え、選び取っていくことが大切だと考えています」とのこと。

それはPHDが研修生に対して「これがいいからこの通りにしなさい」とは言わずに、彼ら自身が何が自分の村にとって良いのかを考え、進もうとするのを応援するのと共通していると思いました。

1人1人の生活、暮らしを大切にしたい人間中心の社会を目指し、そこに至る道は生活する人自身に選び取ってもらう。そして足元である地域とのつながりを大切に、こつこつと1つ1つ積み重ねていく点がコープとPHDの共通点ではないかと話され、私たちも大きくなってきました。

最近では会費をいただくだけではなく、コープこうべの組合員の方々対象の講演に講師として呼んでいただいたり、プログラム面で協力する機会が増えていきます。今後もこうした取り組みを続けていくことを互いに確認して、お話を終えました。



研修生レポート

4月11日に18期生の4人が来日しました。14日からはホームステイ。17日から始まった6週間の日本語の研修も終わり、それぞれの現場での研修が始まりました。

アフダールさん

(インドネシア、男性、31才)

昨年ダスウィルさんに続く2人目の西スマトラ州ソロ郡タベ村からの研修生です。家族は5年前に結婚した奥さん。実はその奥さん、ダスウィルさんの奥さんのお姉さん。つまり彼はダスウィルさんの義理の弟です。さらに、インドネシアでは男性が女性の家に嫁ぐという文化があるため、なんと同じ家に住んでいます。

海辺にある州都パダンから車で3時間程内陸部に入ったタベ村は、日本の信州を思わせる気候の穏やかな山村です。政府の貧困度ランクでは最下位に指定されていて、電気は3年前、道路も次第に整備され始めたところです。生活の中心は農業。主食のお米は自給用にするのが精一杯で、唐辛子やサトウキビから作った砂糖を売って生計を立てています。

日本では、堆肥の作り方をはじめとして、村の農業の生産性を上げるような工夫や技術を学びたいと話しています。イスラム教徒ですので、アルコールと豚肉は口にしません。



タベに広がる段々畑



ホストファミリーをお訪ねして

葛原 時寛さん 香織さん宅(神戸市)

ホストファミリー歴15年、受け入れてこられた人数もアフダールさんで17人目という外国人滞在受け入れの大ベテランである葛原さん一家。アフダールさんを迎えてみた感想は、「早寝早起きの規則正しい生活を送る彼を見ると、自然と共に生きているなーと感じます。つられて私たちも夜早く寝るようになりました」。なんと葛原さんのお宅に来た次の日に、1人で朝早く起き、庭の雑草を抜いたり、玄関を掃き掃除してくれていたそうです。

日本語だけでのやりとりはまだ難しいですが、「顔を合わせて話せば大丈夫」とおっしゃるお父さん。休日には、庭や畑でアフダールさんと一緒に汗を流しています。

ノパドン・カヨムドッさん

(タイ、男性、24才)

タイ東北部に位置するカラシン県クッタカイ村の出身。その地域からはサウェーさん(91年度)以来となる久々の研修生です。ワラヤさん(88年度)、サムコムさん(89年度)、バムルンさん(同左)といった帰国した研修生たちの活動を活性化しよう、と村の農民グループである「サイナワン新しい農業の会」の推薦を受けて来日しています。

村の農業は稲作が中心ですが、雨に頼るため年に1回。東北タイでは、写真にもあるように蒸籠で蒸すもち米を主食にしています。野菜は自給用が基本で、余れば売程度。米の値段が安いことと化学肥料を多用していることが村の大きな問題です。また、現在8名しかいない村の農民グループのメンバーがなかなか増えないことも課題の1つです。

昨年母親を亡くしており、現在は父親と2人のお姉さんとの4人暮らし。もう1人お兄さんがいますが、今は台湾で働いています。宗教は仏教です。



もち米を軽く握って食べます。



伊藤 正夫さん 政枝さん宅(尼崎市)

とにかく家の手伝いをよくするらしく、「気がついたら家中そうじをしていたり、食事の後の皿洗いは毎日してくれます」。また、好き嫌いなく何でもよく食べるので、お母さんは助かっているそうです。ただ、「いつも作り過ぎてしまう」というお母さんに対し、食べ物を残すことに抵抗があるノパドンさん。次の日に食べればいい、ということを理解するまで、出されたご飯をすべて平らげようと必死だったそうです。

ホストファミリーをするのは初めてですが、「大変なのは彼の方だから」と毎日身振り、手振りを混じえながら、色々な話をしているそうです。「彼を受け入れてみて、お互い励ましあって生きていくことの大切さがわかりました」とおっしゃっています。

ブンシー・ブチャレクライワンさん

(タイ、女性、20才)

ブンシーさんの出身地域であるタイ北部メーホンソン県メーサリアンからは、85年度のプリチャーさん以降、アンボンさん(97年度)、サワンさん(98年度)、プラチャクさん(同左)、そして昨年度のポーディさんとここ最近4年連続で研修生を招いてきました。

ブンシーさんは、昨年のポーディさんと同様に、山岳民族の1つであるカレンの人で、この地域にある村の女性たちによる手織り布グループから推薦されて来日しています。その布のグループのメンバー数が現在約200人。1つのグループとしてまとまるには少し多すぎるので2つに分けようという計画があり、ブンシーさんは帰国後その内の1つのグループを引っ張っていきける人材になれば、と期待されています。

生まれはメーウロンノイという山村。両親は今もそこで農業を営んでいますが、ブンシーさんは学校に行くために比較的町に近いシードンチャイ村のおじさん、おばさんの家に住んでいます。お兄さんが2人と妹、弟の5人兄弟で、キリスト教を信仰しています。



布織りに精を出す女性たち



西本 宣之さん 玲子さん宅(芦屋市)

西本さんのお宅は、この5月に2才になったばかりのくるみちゃんと3人家族です。人見知りするというくるみちゃんがブンシーさんをどう受け入れるか少し心配でしたが、ブンシーさんが来た初日から彼女の部屋にくるみちゃんが入りびたり。家にいる時はいつもお互い覚えてた日本語を駆使して一緒に遊んでいるそうです。

家の手伝いも毎日よくしてくれて、「おかげで家がきれいになりました」とお母さん。印象的だったことは、という質問に、「シャワーを浴びる時やお皿を洗う時に水を少ししか出さないのを見て、水の大切さについて改めて考えさせられました」と答えてくださいました。

リンダ・アニスさん

(バブア・ニューギニア、女性、22才)

出身はモロベ州アンゴリ村。ハリエオさん(97年度)の隣村にあたります。人口は約100人で世帯数は約14戸。水道、電気はまだなく、水は近くの川で汲んだり雨水を利用し、調理はマキ、灯りにはケロシンを使っています。村での生活は農業が中心で、主食のヤマモモ、タロイモ、サツマイモ以外にもバナナ、サトウキビ、ココナツなどを作っていて、余ったものは町の市場で売ったりしています。

リンダさんによると、村人たちの多くが保健衛生や栄養に関する知識を十分に持っておらず、不衛生な環境で料理を作ったり、バランスの悪い食事をとっているそうです。日本では、農業も合わせて学びながら、様々な食材を作ることとそれをうまく調理することをつなげて考えられるような研修を行なう予定です。

家族は、父親が10年前に亡くなっていて、母親は再婚し、少し離れた海辺の町で暮らしています。3人兄弟の末っ子。敬虔なクリスチャンで、日本でも日曜日には教会に行っています。



ビーム(袋)に赤ちゃんを入れて体重測定



やまき 八巻 晤郎さん 和子さん宅(神戸市)

「よく食べ、よく寝て、足腰が強い」とはお父さんのリンダさん評。八巻さんの家の前にある急な坂道を息も切らさず早足で歩き切ります。お宅では、何でも食べますが、とんかつ、じゃがいも、豆が特に好きとのこと。

休みの日に繁華街へ出かけた時には、「みんなが買い物しているようには見えないし、いったい何をしているんだろう」と人の多さに戸惑っていたようです。鎖につないで犬の散歩も不自然に写るらしく、じっと鎖を見ていたそうです。

日本語の勉強に非常に熱心で、最近では、夕食時に聞いているラジオからいくつか単語を拾えるようになってきました。



これからも  
ご意見待ってます。

より良い会報のための、アンケートにご協力ありがとうございました。全国の会員にお送りし、148人の方から回答をいただきました。その中から5人の方に絵ハガキセットをお送りしました。

まず、編集者が一番気になる基本的な質問として、「どの程度読んでもらえているんだろう」については、7割以上の方が全体に目を通しているということでした。その理由は、活動の動きが分かる、また事務所に行かない代わりに活動に参加している気持ちを確認できるというのがありました。あまり読まない方の理由は、時間がないというのが一番多くありました。

次に気になる「好きな記事は何ですか？」の質問では、研修生レポートが27%、次いでスタディツアーレポートが18%、東西南北・問題解決・取組み日記が15%、PHDニュースが12%、〇月×日のPHD協会が11%でした(図1を参照)。その理由は研修生レポートについての意見が多く、研修生を身近に感じる、親しみをを感じる、若者の努力に魅せられる、熱

い思いが心を打つ、出会いのあった人たち、どこの国から誰が来て、どのようなことに興味を持ち、何を勉強しに来るのか、日本で勉強したことが現地で役に立っているのかなど、知りたいからというものでした。皆様が研修生のことを一番気にかけて下さっているのが分かる結果でした。また、次いで多かった意見が〇月×日のPHD協会と草の根交差点についてで、職員を身近に感じる、事務所の様子が分かるからというものでした。

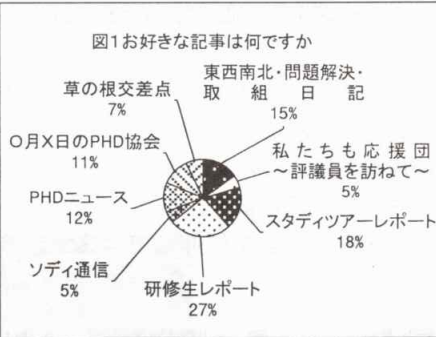
「その他にどのようなものが読みたいですか？」という質問では、エッセイ風の文化紹介、世界や日本の時事問題、国際協力関連の用語説明、本や資料紹介という順序になりました。それ以外では、研修生の研修の感想、帰国後の様子をもっと増やして欲しいという声が多くありました。

レターへの自由な意見としては、3月に出了た子ども向けレターへの感想や特別連載の評判、職員への激励とアドバイスなどがありました。レターを通して自分の生き方を考え直すことができる、連帯を感じるとい

う意見もいただきました。

活動に関わっている方の声や輪が広がるようなものがあつたらよい、その他に読みたいものの上位であつた文化紹介や時事問題などに関してPHD風に捉えたものがよいなど、提案をいただきました。また、寄附者名簿は楽しみにしてる方、要らないという方双方有り。今回は字を小さくしてみました。関西弁表現になじめないと、関東の方からのご意見も。

ページ数、回数、紙のサイズ、写真の大きさと数、字の大きさ、印刷の色に関するご意見にも、少しずつ改善できるところから始めたいと思っています。早速、写真を大きくしてみました。いかがですか？



ことから始めよう。具体的にはタイの農村に住んでみることに。

今まで悩み、涙し、笑い、また助け、慰め、ともに歩んできたのは多くの友(ボランティアや会員の皆さん、職員、研修生)であり、続けてこれたのは、家族の支えもあってこそ…。ひとりひとりに感謝したい。そして引き続き一緒にPHDにかかわっていきましょう。 小松 みち



送別会の田中さん、小松さん、谷さん(左から)

研修生はじめ、研修指導者、ホストファミリー、ボランティア等、多くの方々に出会い、教えられ、考えました。北の国と南の国の隔差を埋めるお手伝いをしたいと思い始めた仕事でしたが、その中で本当の意味でも持っているのは私たちではないかと感じました。よそから様々なも

のを取ってきて成り立つ日本の豊かな暮らしがアジアの村の貧しさの原因であるように感じました。そんな日本の暮らしを経験した研修生は、日本のようになるのが豊かではないと言いますが、一方で日本の便利さにあこがれることもあります。「共に生きる社会」を実現するためには、反面教師として学んでもらうのではなく、私たちの方が本当の意味での豊かさを考え、生活をする必要があるかと思いました。まず私自身がそのような生活をし、そこから、今後も国際協力に関わっていきたいと思っています。

本当にありがとうございました。 谷 朱子

この3年間、本当に多くの出会いと出来事がありました。私達は、講演などをする時に「色々な問題の根っこは同じ。国際協力というけれど、まずは自分の周りから始めてください」と

よく言います。そのことを自らが実感してきたと思います。研修生と一緒に訪れた水俣や筑豊、村を訪ねてのスタディツアー、日常の色々なやりとりの中で。

自分のことだけを考えるとどんなことが起こるのか、国内外で起きている様々な問題が教えてくれているように思います。今の状態が続けることが良くないと多くの人は分かっていますが、痛みを伴うことはなかなか行動に移せない、でも少しずつでも変えていかないと。これから、私が生きていく上で大切にしていきたい姿勢のようなものを

もらった気がしています。 本当に多くの方に支えられていることをいつも感じてきました。本当にありがとうございました。

田中康代



左から、古本、芳田、納堂

納堂邦弘(25歳 大阪、枚方育ち)

谷さんに続く2人目の国内研修生からの職員。採用決定の2月末から引き継ぎを受け、7代目の研修担当者。

〇月×日のPHD協会

職員 伊藤 入社4年目にして初めて新職員を迎え、一気にベテランに。適確な指導と助言で後輩の鏡になれるようがんばってね。

職員 山西 偶然、今年のホストファミリーは少し前迄やっていたラグビー仲間。5年ぶりの再会。こういうのをたまたまといひますね。

職員 藤野 職員男女比がこれまでの3:3から4:2に。ところがこれで強さのバランスが何とかとれるようになったと感じるのは私だけ？

職員 納堂 国内研修生時は2時間弱かけて通った。職員になって神戸にお引越。通勤は原付で10分。浮いた時間を大切に使うね。

古本妃留美(26歳 広島、江田島育ち) 学生時代にボランティアとして入り。2年間の名古屋生活の後、再び神戸へ。フェアトレードのお店「ぐらする一つ」のアルバイトを経て。

芳田弓生希(27歳 西宮&神戸育ち) 外資系の会社のパートタイマーのかたわらボランティアとして時々出入り。小松・田中コンビの担当分野を芳田・古本コンビで。まず名前は読んでもらえないのが共通する2人です。

\*新職員の読み方は、のうどう、ひとみ、ゆぶきです。よろしくお願ひします。

職員 芳田 高校からの講師依頼にこたえて6月デビュー。いきなりメインは荷が重いのでOG田中さんに助っ人を頼んで。早く1人立ちしてね。

職員 古本 理事会席上で、「理事の皆さんからの電話を取りつぐ古本です。」とまるで交換手のような挨拶で強い印象を残す。別の仕事もしてね。

(お昼に外食するときお金をかける順)

題に自主的に取り組む学習です。 PHD協会でもこの動きに積極的に参画していこうと教員の方々、教育委員会等と話し合いを始めています。

インドから講師を迎えます ここ2年、イギリスからローレンス先生、インドからポール先生、と毎秋、海外から講師を招いて行なってきた人材育成・組織強化トレーニング。今年はインドのジョン先生を迎えて9月下旬～10月上旬に予定し、現在調整中です。詳細はお問い合わせ下さい。

農文塾で熱く語る ～第15回草の根生活塾 研修生の村の問題解決について語る1泊2日。研修生の作るごはんも魅力。PHDならではの夏の一夜を過ごしませんか。 日時:7月29日(土)～30日(日) 場所:たんば農文塾(兵庫県篠山市) 費用:8000円(1泊3食付)

PHD NEWS

□会費・ご寄附寄託状況

2000年	2月	116件	1,857,242円
	3月	163件	2,270,001円
	4月	82件	801,536円
		361件	4,928,779円

皆様のご協力に厚くお礼申し上げます。昨年度の同時期に比べ、件数は大きく変わりませんが、金額が25%の減少と厳しい数字でした。

今号の2ページでも申し上げるように、毎年6月は新年度会費のお願いをしています。ご協力お願いいたします。

□多胡理事、長らくありがとうございました

PHD協会の設立当初から尽力をいただいていた多胡楯祐理事が、満90才のご高齢を理由にこの5月17日の理事会をもって退任されました。18年間にわたるお力添えに厚くお礼申し上げます。また、神田栄治理事が退任され、あらたに辻井博氏が理事に就任しました。

□広島廿日市RCの記念事業に

5月15日、広島廿日市ロータリークラブ(土居洋総会長)より創立5周年の記念事業としてPHDへの協力をいただきました。多額のご寄附に感謝申し上げます。

□研修指導の田中さん、コープこうべ虹の賞受賞

兵庫県賀賀町の会員、田中五郎さんが、6月1日、第9回コープこうべ生活文化・福祉賞(虹の賞)を受賞されました。田中さんは長らく研修生を受け入れ、フォローアップでタイへ毎年のように出かけていただいています。おめでとうございます。

□「総合的学習」にPHDを

こどもの「生きる力」を育てるため、地域や子ども達の状況に合わせ、地域のリソースを生かし、創意工夫して行う教育活動ー総合的学習ーの実施にむけて学校が動き出しています。

これは、今までの画一的な内容を変えて、国際理解、情報、環境、福祉、健康など従来の各教科にまたがる課



新規会員・寄付者ご芳名は、  
個人情報保護のため  
掲載しておりません。